

期日 : 平成19年7月5日～7月9日
 場所 : ベトナム (ハノイ)・香港
 視察先 : THANGLON METAL WARKES COMPANY (国営企業)

青年部の海外視察研修は、今回で3日目となるが、以前の2回は、海外に進出した日本企業を訪問し、日本人の視点から海外進出のメリット、デメリット、リスク、人種、宗教問題などを捉えてきた。そこで今回は、現地の視点で運営されている国営企業について視察を行う事とした。ポイントは、生産管理技術、ロジックなどがどの程度構築されているかである。また、同時に以前、視察したホーチミンとハノイの違いを観察する。そして訪問する2カ国の違いを検証する。

7月5日

成田からキャセイ航空にて香港に向かう。香港まで4時間半である。香港の空港は、搭乗口も80以上あり、国際空港として充実している。ここでベトナム航空に乗り換えハノイへと向かう。香港-ハノイは約2時間半と近い。ハノイの空港は、日本のローカル空港の様であり、かなり見劣りする。滑走路の整備状態もあまり良くない。入国審査を終え、外に出ると雨であった。スコールの様な激しい雨ではないが、雨季に当たる今、雨も多いとの事である。街の様子は、ホーチミンより車が多い。全体的な交通量は、ホーチミンの方が遥かに多い。何しろオートバイの数が多かった。活気としてもやはり、ホーチミンの方が上である。経済の中心は、ホーチミン、政治の中心はハノイと言われる所以であろう。ホテルは、ハノイ郊外にあるフランス系のホテルで5ツ星である。設備も充実しており共産圏という印象は無い。サービスなども国際ホテルとして十分なレベルにある。



ハノイ郊外の宿泊ホテル

7月6日



視察先のアポイントが14:00の為、午前中に市内の施設見学を行う。ホー・チ・ミン廟では、常時警備の軍人がおり、施設警備に当たっていた。中には、ホー・チ・ミンの遺体そのまま保存されているそうである。ベトナムという国にとって民族解放に大きな役割を果たしたホー・チ・ミンは、神にも等しい存在との事である。

ホー・チ・ミン廟



文廟

文廟には、大学があり、以前は科挙による英才教育の為の施設であった。現在、ハノイ市内には7つの大学があるが、卒業式はこの文廟にて行われるとの事であった。この日も、多くの受験生などが訪れていた。

午後、アポイントの時間に合わせ、タンロン・メタル・ワークスを訪問する。この会社は、1965年の設立であり、グループ会社を5つ所有している。工場は、ハノイに4ヶ所、ホーチミンに1ヶ所との事。売上高は、約3800万ドル（約46億円）。社員2700人。平均年齢27~30才位との事。生産品は、プレス加工による処理器具（ナベ、フライパンなど）、オイルランプ、オートバイのマフラー、鋳物による釜などである。この中で、国内のホンダ向けの売上が40%を占め、年率20%の割合で増加傾向にあるとの事。原材料のホットコイルは、韓国からの輸入であり、関税は、10%。製品の輸出先は、北欧がメインで、輸出関税は、0%との事。社員は、高校新卒を毎年200人程度受け入れており、募集倍率は、1.5倍。採用条件の中に身長160cm以上というものがあり、枯葉剤などの影響を受けた人を排除する意味もあるのかもしれない。賃金は、100ドル/月程度であり、ホーチミンは、20%程度高いとの事である。勤務は、日曜のみ休みで26日勤務体制である。男女の比率は、男性が65%、女性が35%との事である。環境問題については、あまり関心が無い様で、最近排水や、排気関係で規制がある程度であった。一般的には、サラリーマンの平均賃金は、月額2万円程度との事。ベトナムの家庭では、食事は3食とも外食の場合が多く、朝食に食べるフォー（うどんの様な物）で70円程度との事。物価は、やはり日本の1/10程度だろうか。

その後、工場を案内してくれたが、写真撮影は、不可との事であった。工場内は、非常に暑く所々で扇風機が回っていたが、どの程度役立っているのだろうか？というレベルである。昔ながらの簡単なプレス機が並んでおり、手作業でプレスを行っていたが、安全装置も無く、非常に危険な作業風景であった。一応教育も行っているらしいのだが、レベルはとても低い。これでは、労災事故も多いのだろうと思われる。



生産品目の調理器具

また、流れ作業という訳でもなく、非効率な生産現場であった。一昨年訪れたホーチミンの日本精密は、日本での安全基準、作業効率を実現していたが、今回の企業は、その足元にも及ばないレベルである。やはり、日本の生産技術、ノウハウは合理的ですばらしいものがある。一方で、日本人が既にやらなくなった作業を劣悪な環境の中でも、黙々とこなしていくベトナム人の勤勉さはすばらしいと

思う。我々、日本人は贅沢に慣れてしまい、豊かな国の中で、勤勉である事をともすれば、カッコ悪いなどと評する風潮が見受けられ、暗澹たる気持ちにさせられる。フリーターなどという言葉遊びで、日雇い労働をそれらしく見せ、かすかなるプライドを満足させている人を悲しくも思う。努力を惜しまず、勤勉に働く事こそ一番大切な事だと思うのだが。

7月7日

ハノイから約3時間バスに揺られ、世界遺産であるハロン湾を訪れた。2時間程度のランチクルーズである。ここには、こういった観光船が500隻ほどあり、1日2回の運行を行っているとの事。港を離れて30分。世界遺産らしい見事な眺望となる。切り立った島が連なり、海の桂林と言われるだけはあると思う。1時間程、湾内を回り帰途へと就いた。



世界遺産
ハロン湾

船首には必ず竜の飾り



7月8日

香港へと移動する。出国フロアには、多少免税店などもあり、ホーチミンの空港よりは、近代的である。香港に入国すると、近代社会に復帰した安心感がある。治安も良く、交通事情もいい。街のク

ラクシヨンの鳴っている割合で、近代化度が測れるという人もいるが、香港は間違いなく近代国家である。港湾設備にしてもアジア随一というだけはある。空港、港湾、金融とアジアの中心としての地位を占めているだけの事はある。しかし、価値基準の中においてお金だけに特化していった印象も垣間見える。コピー商品が横行しており、モラルが欠如しているというよりは、お金持ちは本物、庶民はコピーといった住み分けが堂々に行われている。



また、住宅事情も悪く、国内で戸建住宅を持っている人は3人しか居ない。基本的には、マンションであり、6畳2間、キッチン2畳の住宅で5,000万円程度するそうである。豊かさとは、何かを考えざるを得ない状況である。空港、港湾、金融と引き換えに差し出しているものも多いと思う。

香港島

宮崎アニメのモデルになったとも言われる水上レストラン



香港島山頂付近の
夜景

今回の視察に於いては、4泊5日の長丁場であったが、アジアトップクラスの香港と発展途上のベトナムといった2カ国を続けて見れた事は、非常に意義深く、また国家の発展の方向性というものについても考えさせられる視察であった。確かに、香港は大きく発展し、アジアの金融センターとして位置しているが、決して「国民は豊かである」とは言えないと思う。貨幣と言うものを唯一絶対の価値基準として邁進した国家の姿かもしれない。アメリカ発M&Aが盛んに論じられているが、近年のM&Aを見る限り、残念ながらそれによって社会が豊かになるとは思えない。社員もより幸せになると思えないのである。ファンドを中心とした短期的な収益確保、お金がお金を生むいびつな世界しか見えてこないのだ。日本においても、日本式経営のいい所も沢山あったはずだが、常に「アメリカ発の理論は正しい」という風潮に流されていく社会を、我々はもう一度ゆっくり考える必要があるのではないだろうか。

アルバイトをフリーターと称し、ニートと呼ばれる引きこもりが増える日本の社会。これらの遠因は、物を生産し、付加価値を付けたり、サービスを提供する事により対価を得る。この基本から外れた所ばかりを見ているからではないかと思う。IT企業などが華々しい業績上げていく中で、地道に働く事が馬鹿馬鹿しく思えるのかもしれない。しかし、地味な仕事であっても社会に貢献しているのである。株やファンドの様にお金がお金を生む世界というものも否定はしないが、ここに向かって邁進してはいけないのだ。確かに、アマゾンを始め、ネット企業では、営業利益率100%という世界もある。だが、国中がここを目指したのでは、産業は空洞化し、失業率は向上し、社会は不安定になっていく。短期的な収益が唯一絶対の価値基準ではないのだ。今回の2カ国の対比が国家や、企業の有り方を示唆している様に思う。日本は他国から見ればれっきとした発展国であり、ASEAN+3のGDPの50%を占めている。大国である中国ですら日本の半分程度なのである。我々は、もっと自信を持ち、落ち着いて企業のあり方、そして社会のあり方を模索すべきなのだと思う。ベトナムは、確かに金銭的には貧しい。しかし、そこに暮らす人々は、たくましく、エネルギーで生き生きしていた。本当に、この国から学ぶ事は多い。

さて、今回の海外視察において、事務局の随行を要望したのだが、残念ながら実現しなかった。誠に残念である。最近の日本経済の状況について景気回復が新聞紙上に躍る中、地域ではなかなか実感出来ないという話も同時に耳にする。なぜなのであろうか？先ずは、既に日本経済は、世界の潮流に完全にビルトインされており、日本だけで語る事自体ナンセンスという事を認識する必要がある。そして、この世界潮流にさまざまな企業努力を払い、苦労に苦労を重ねながら乗った企業こそ世界の好景気を実感出来るのではないだろうか。そして、この潮流に乗れなかった者が、努力もせず、格差という言葉で日本はまだ景気が悪いという。全くナンセンスである。日本は、諸外国に比べても十分格差が少ないと言うのに！！皆が平等に好景気でないと景気が良くなったとは言えないのであろうか？だとしたら病的ではないか？中国の人口は、13億人でありこの10%が富裕層だとすれば1億3000万人と日本の人口以上である。上海では、ポルシェを始め、アウディ、ベンツなど高級車を数多く目にする。一方で農村部では、まだまだ未整備な部分があり貧困である。しかし、それでも彼らの生活水準は確実に上がっているのである。格差があるから、リッチになろうと努力するのだ。格差があると言う前に努力すべきである。10年前と同じような商品を同じように並べていながら売上が上がらないという。当たり前ではないか。企業として、商人として、猛省し努力すべきである。インドの様にカーブ制度が絶望的な程はびこっている訳ではないのである。

寺島実朗氏のものの見方に「知的三角測量」というものがある。一国だけを見るのではなく、例えばアメリカから見た日本、中国から見た日本、欧州から見た日本という様に多面的に物事を見ていこうと言うものである。そしてこうした、マクロな部分から、日本の中の埼玉、埼玉の中の所沢、所沢

の中の企業・商店と言ったミクロな部分にまで絞り込んでいく。そうしてなぜなのかを判断していく。こういった見方が必要なのではないだろうか。

青年部は、中小企業相談所の中に所属しているが、所沢商工会議所の中において、この中小企業相談所の役割は、何なのだろうか？所沢商工会議所は、間違いなく所沢最大の経済団体である。その中で、所沢市に財界として意見を提言するとした場合、どこがデータを収集し、分析していくのであろうか？市内の中小企業と一番接する機会が多く、経営的な相談も受けるであろう中小企業相談所が、地域のデータを一番持っており、企業のニーズや困りごとを一番良く知っているのではないだろうか。私は、中小企業相談所こそ、シンクタンクたるべきだと思う。ここのスタッフは、セミナーや、視察などに積極的に参加し、世界的な潮流を目の片隅で捉えながら行政や加盟企業にアドバイスを行っていくべきではないのだろうか？簿記の付け方といった後方事務よりも企業を発展させていくべき視点こそアドバイスすべき点ではないのだろうか。創業者は、全てを賭して企業経営に当たっているのだ。日本経済が、世界の潮流に完全にビルトインされている現状では、地域だけを見ていたのでは、的確なアドバイスなど望むべくも無い。だからこそ、事務局の不参加は、誠に残念であり、所沢商工会議所にとっても大きな損失だったと思えてならない。

最後に、今回の海外視察において、企画に運営にとご苦労された久米委員長に心より感謝すると共に、本企画を承認頂きました所沢商工会議所様に厚く御礼申し上げます。また、本企画に参加頂き、色々ご指導頂きました諸兄に心より感謝し、海外視察研修の報告とさせていただきます。

以上